令和６年度

前　期

入　学　試　験　問　題

国　　語

注　意　事　項

１．試験問題は指示があるまで開かないでください。
２．解答は必ず解答用紙に記入してください。
３．字数制限のある問題は，句読点や符号（ふごう）も解答の字数に含（ふく）みます。
４．問題冊子・解答用紙に，受験番号と氏名を記入してください。
５．問題冊子は必ず持ち帰ってください。

受験番号	氏名	

近畿大学附属広島中学校東広島校

問題は、次のページから始まります。

一　次の各問いに答えよ。

問一　次の――線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

① 県庁ショザイ地に住む。

② トランプのエフダを数える。

③ 母親トクセイのハンバーグ。

④ チクジョウ当時の瓦（かわら）が見つかる。

⑤ 生糸（きいと）で布を才る。

⑥ 合格の朗報が届いた。

⑦ 家路を急ぐ。

⑧ 花を供える。

問二　次の表現の空欄（くうらん）□にあてはまる漢字一字を答えなさい。

①　□刀直入（前置きなしにすぐ本題にはいること。）

②　火に□を注ぐ（勢いの激しいものに、さらに勢いを加えることのたとえ。）

問三　次のことわざとほぼ同じ意味を持つものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

猿（さる）も木から落ちる

ア　犬も歩けば棒に当たる　　イ　河童（かっぱ）の川流れ

ウ　猫（ねこ）に小判　　エ　鬼（おに）に金棒

問四　次の慣用句の意味として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

板に付く

ア　立場を有利にするように何かを利用する。　　イ　いつまでも恨（うら）みに思っていて忘れない。

ウ　仕事や役柄（やくがら）がその人によく合っている。　　エ　驚（おどろ）きや恐（おそ）れのために顔が真っ青になる。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

食物を分配する特徴をもった種とそうでないものに分けると面白いことがわかります。ここでいう分配とは、相手に食物を差し出すような積極的な行動ではなく、相手が目の前の食物を取ってもそれを許容するといった消極的なものです。［　A　］、ニホンザルは、基本的に食物を分配しません。序列のはっきりしたサルは、エサを前にすると、必ず強いほうが独り占めをし、弱いほうが引き下がります。一方、チンパンジーやゴリラは分配をします。エサを持っているオスは、弱い立場にあるメスや子どもから分配を要求されれば、取っていくのを見逃すことがある。これが霊長類の食物分配です。

霊長類には４５０（日本モンキーセンター編『霊長類図鑑』（京都通信社）２０１８年による）ほどの種があるとされますが、おとな同士で食物が分配される種では必ず、おとなから幼児に対しても食物が分配されています。［　B　］、おとなから幼児に食物が分配されていても、おとな同士で分配されるとは限りません。これはつまり、元々はおとなが、そのおとなが養育している子どもに食物を分配し、その行為が、おとなの間に普及していったということでしょう。

さらに興味深いのは、①この食物分配が、ゴリラや人間など、高い知性をもった種にだけ起こることではないということです。南米には、タマリンやマーモセットなど、ポケットモンキーと呼ばれる小さなサルたちがいますが、彼らの社会では、おとな同士の間でも食物の分配が見られます。彼らは、双子、三つ子を当たり前のように産みます。複数の子どもたちをお母さんだけでは育てることができないので、年上の子どもや複数のオスたちが、生まれた子どもを背中に乗せて運び、子どもたちに食物を分配するなど、皆で世話をします。

つまり、②食物の分配は、知性の高さではなく、子育ての負担の大きい社会で起こる現象であるということです。子育

てにかかる親の負担が大きいと、ほかの個体が子育てに関与する機会が生じる。ゴリラをはじめ類人猿の場合、子どもの成長が遅いので、子育ての期間が長く、お母さんのお乳を長期間吸っています。離乳期間も長く、その間徐々におとなの食物を覚えていきます。お母さんが長い間手をかけなくてはいけないことも、負担が大きいということです。短期間に成長の遅い子どもをたくさんつくる人間は、ポケットモンキーのような多産と、類人猿のような遅い成長という、食物分配を引き起こす二つの要因をあわせもっているのです。

食物分配と共感力には強い関係があります。食物分配をしないニホンザルと、食物分配をするタマリンやマーモセットで、他者をいたわる行動（アザー・リガーディング・ビヘイビア）がどれくらい違うかを調べた結果、ニホンザルではこの行動が見られなかったのに対し、タマリンやマーモセットでは、脳が小さいにもかかわらず、この行動が多く見られました。

こうした研究から、共感力は、共同で子どもを育てる種、子どもの成長に時間がかかる種で発達した可能性が高いと推測できます。こうした共感力が、おとなと子どもの間だけでなく、おとな同士の間へと拡大したのでしょう。

ただし、③人間の共感力の強さは、ほかの霊長類の比ではありません。

サルにも共感力はあります。１９９０年代の初めにジャコモ・リゾラッティというイタリアの学者は、サルの脳の中では、ほかのサルの行動を見ているときと、［　Ⅰ　］がその行動をしているときと同じ部分に電気が発生することを発見しました。まるで鏡に映したような反応であることから、ミラーニューロンと名付けられましたが、これは［　Ⅱ　］の考えていることを「理解する」能力ではありません。［　Ⅲ　］の感じていることを「同じように感じる」エンパシーと呼ばれる能力です。サルには「サル真似」ができません。相手の行動を即座にそっくり真似をすることはできないし、ましてや真似をする相手がそこにいない状態で同じことをすることはできないのです。

一方、人間は目の前にその人物がいなくても、そっくり真似ることができます。悲しい映画を観ると、映画館を出た

ときに気分が落ち込んでいるとか、ヒーロー映画を観たときには、自分もヒーローになった気分になるとか、こういう現象が起こるのは人間だけのものでしょう。他者と同じ動きができるだけでなく、同じような心持ちにもなります。他者が悲しんでいたら自分も悲しくなるし、他者が怒っているのを見ると自分も怒りたくなる。コピーする能力ともいえるこの感情の動きもまた、人間の高い共感力の証しです。

「教える」という行為ができるのも人間だけです。

「学ぶ」ことはどんな動物でもします。動物の子どもは、親や年上の仲間に叱られて学ぶのが基本です。ニホンザルの子どもも、これをやったらまずいということを年上の仲間に叱られて学ぶ。「教える」のではなく、「叱る」ことで学ばせるのです。ゴリラは、ぼくのように、ゴリラになろうとしてゴリラの群れに入ってきた人間に対しても叱ってくれますが、これも「教える」ではありません。「教える」には条件があります。自分と相手の知識の違いを互いに理解している状況で、知識のあるほうが足りないほうに自分の不利益を顧みずに行うのが「教える」で、教えるほうが、自分の利益になるような誘導の仕方をしたら、それは「利用」であって教えたことになりません。

人間は、「教える」をさらに発展させ、親と親以外のおとなたちが、一生懸命子どもを先導します。

④ サルやゴリラの世界から見ると、人間は、とてつもなくおせっかいな生き物に違いありません。子どもがやろうとしていることに手を貸すだけではなく、まだやろうともしていないことに対しても、「こうなったらいい」「あれを見て。君もいずれあのようになる」などと言って、背中を押したり、子どもの手を引いたりする。こんなことはほかの動物は絶対にしません。共同保育が人間のおとなをおせっかいにしました。そして教育を生みました。人間はおせっかいになったからこそ、子どもは目標というものをもつようになったのです。

（山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』より）

問一　空欄（くうらん）［　A　］・［　B　］にあてはまることばとして最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（同じ記号は一度しか使わないこと）

ア　やはり　　イ　また　　ウ　しかし　　エ　きっと　　オ　たとえば

問二　空欄（くうらん）［　Ⅰ　］～［　Ⅲ　］に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　Ⅰ　自分　Ⅱ　他者　Ⅲ　他者

イ　Ⅰ　自分　Ⅱ　自分　Ⅲ　他者

ウ　Ⅰ　他者　Ⅱ　自分　Ⅲ　自分

エ　Ⅰ　他者　Ⅱ　他者　Ⅲ　自分

問三　――線部①「この食物分配」の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　序列がはっきりしているサルの世界では、強いサルが弱いサルにエサを分け与えている。

イ　チンパンジーやゴリラは、弱い立場にあるメスや子どもにオスが食物を分け与えている。

ウ　おとなから食物を分け与えられた子どもは、自分の子どもにも食物を分け与えるようになった。

エ　子どもに食物を分け与えたおとなは、おとなの間でも食物を分け与えるようになった。

問四　――線部②「食物の分配は、知性の高さではなく、子育ての負担の大きい社会で起こる現象である」と筆者が言うのはどうしてですか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　産まれてくる多くの子どもを共同で育てるタマリンやマーモセットに、他者をいたわる行動が多く見られたから。

イ　タマリンやマーモセットは、多くのおとなに囲まれて育つなかで、少しずつおとなの生き方を覚えるようになるから。

ウ　集団で行動していても自分と他者の違いを意識して生きるニホンザルに、自分の役割だけを果たそうとする傾向が見られるから。

エ　他の種よりも高い知能を持つニホンザルは、計画的に食物を分配するが、他者をいたわる行動が極端に少ないから。

問五　――線部③「人間の共感力の強さは、ほかの霊長類の比ではありません」とありますが、人間の共感力が強いといえるのはどうしてですか。五十字以内で説明しなさい。

〈下書き〉

問六　――線部④「サルやゴリラの世界から見ると、人間は、とてつもなくおせっかいな生き物に違(ちが)いありません」とありますが、人間のどういう点が「おせっかい」と言えるのですか。サルやゴリラと比べながら、六十字以内で説明しなさい。

〈下書き〉

問七　本文の説明として適当でないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　食物分配が起こるのは多産である種や成長が遅(おそ)い種であるが、人間はどちらの要因も兼(か)ね備(そな)えている。

イ　人間と同じ霊長類(れいちょうるい)であるサルにも共感力があるが、相手の行動をすぐにそっくり真似(まね)することはできない。

ウ　「教える」という行為(こうい)は、知識のある者が知識の足りない者に対して自分の利益を求めずに行うことである。

エ　人間は他の類人猿(るいじんえん)よりも高い知性を持った種になるために、子どもたちに目標を持つ大切さを教えている。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二十年近い前のことだから、もうむかしといっていいかもしれない。ぼくはまだ小学校の三年生だった。

その年の夏休みには、町の子どものあいだで、もちの木の皮から、(注)とりもちを作ることがはやった。だれがどこでおぼえてきたものか、もちの木の皮をしばらく水にさらし、すりつぶしながら、かすをあらい流していくと、上等のとりもちができる。

近所の家の庭に、五本ばかりもちの木があって、皮はそこからとった。ところが、大勢がよってたかって、その庭をねらったものだから、たちまち見つかって、ぼくたちは大目玉をくった。

「平気だよ。峠(とうげ)の向こうにいけば、きっとあるさ。」

①大目玉のあとで、年上のがき大将は、舌をだして、自信たっぷりにそういった。みんなもそう思った。〝②峠の向こう〟には、町にはないものがなんでもあった。もちの木だって、あるにちがいない。ぼくもやはりそう考えたのだ。

峠というのは町のはずれにあった。裏通りからつづく細い道が、町のうしろの丘(おか)にぶつかって、ゆきどまりのように見える。それでもかまわずに丘のふもとまでいくと、左におれて、きゅうな石段があった。それをのぼりつめると、やっとひとりが通れるくらいの、せまい切り通しの道になる。

ここが峠だ。ぼくたちはそうよんでいた。このうす暗いトンネルのような切り通しをぬけると、ぱっかりと明るい村の景色が目の下にひろがってくる。いままでの町の感じが、いきなり村の景色にかわるのだ。どういうわけか、風のふきぐあいまで逆になってしまう。

ⓐここは町から村へぬける近道だった。しかし自転車も荷車も通れないから、この道を使う人はめったにいない。いちばん使うのは、ぼくたち子どもだったかもしれない。

ぼくたちは、ⓑここを通ってよく峠の向こうへ遊びにいった。そこには、小さな流れや、迷路のような細道があり、いろいろな獲物があった。春はさくらんぼ、夏は木いちご、秋になると、くりの実やあけびがとれる。やまいもを掘るのもおもしろかった。小川のふなやどじょうを追いまわすのはもちろん、夏休みの宿題の昆虫採集もⓒここでする。学校で使う竹細工の材料もⓓここでまにあわせる。

だから、もちの木も、ここへいけばきっとあるだろうと、みんなが考えた。

「だいぶ遠くまでいかなくちゃいけないぞ。」

がき大将はそういった。③ぼくたちはうなずいた。峠の向こうは奥が深いのだ。近くでは、農家の目が光っているから、いままでも、ろくな獲物はなかった。そればかりか、うっかり畑にはいったりすると、どなられることもあるのだ。

こんどは、かなり奥の、山の中までいかなくてはならないだろうと思った。

ぼくたちは、みんなでもちの木をさがした。皮をはいでも、しかられないようなところにあるのを見つけるのは、なかなかたいへんだった。やっとさがしあてたのは、峠から三十分もはいった山の中で、さいわいそれはかなり太い木だった。

しかし、がき大将は、その木の前で、ぼくたちにいった。

「この木はおれの木だぞ。だまってとったら承知しない。そのかわり、すこしずつわけてやる。」

それはやむをえないことだったが、④ぼくはがっかりした。三年生のちびのぼくには、ほんのお情けに、わけてくれるだけだ。ぼくはいつも指の先でひねるくらいのとりもちで、がまんしなければならなかった。

ぼくは、思いきって、もちの木を自分ひとりでさがそうと考えた。しかしあんなにみんなでさがしたのに、一本きりなかったのだから、かんたんにさがせるとは思えなかった。それに、ひとりでは、あんまり遠くまでいく元気もなかった。

ぼくは、とりあえず、みんながばかにしている峠の近くを、あたってみるつもりになった。このあたりを峠山といっていたが、だれもさがしてみなかったところだ。

暗い切り通しの道に立ちどまり、せみの声をききながら、ぼくは右がわによじのぼろうか、それとも左がわにしようか、と、しばらくまよった。そしてのぼりにくい左がわの山にきめて、もぐりこんでいった。

顔にはねかえる笹や小えだをよけて、もちの木の葉の色をさがした。しばらく進むと、足もとがきゅうに落ちこんでいて、ぼくはがけの上に出た。向かいにも山があったし、草が深くて先が見えなかったので、ぼくはあやうくころげ落ちるところだった。

きもをひやして、木につかまった。そのままのぞきこむと、かなり高そうだった。ぼくは左に大まわりした。

がけをまわっておりると、大きな杉林にはいった。杉林の中はしいんとしていた。もちの木は見つかりそうにもなかった。ぼくは、さっきのがけの下へいってみようと思い、杉林をつっきっていった。正面にはがけの上からも見えた、とがった小山があった。つきあたりのやぶをむりやりおしわけて、小山にのぼりはじめた。

いくらものぼらないうちに、ぼくは、その小山がかくしていた、奇妙な三角の平地にひょっこりと顔を出した。

ふいに、そこへ出たときの感じは、いまでも、わすれない。まるでほらあなの中に落ちこんだような気持ちだった。思わず空を見あげると、杉のこずえの向こうに、いせいのいい入道雲があった。

右がわが高いがけで、木がおおいかぶさっている。左はこんもりとした小山の斜面だ。ぼくのはいってきたところには、背の高い杉林がある。この三つにかこまれて、平地は三角の形をしていた。杉林の面が南がわだから、一日じゅう、ほとんど日がささないのだろう。足もとは、しだやふきやいらくさがびっしりはえていた。

そのときまでの、⑤いきごんだ足どりは、ここですっかり消えてしまった。こういう湿気のある場所には、よく、まむしがいるのだ。ぼくは、ふきやいらくさを棒でたたきながら、一歩一歩進んだ。左手の三角のかどに、小さないずみが

わいているのを、すぐに見つけた。

水の流れていくほうをのぞいてみると、かすかに明るく見える。

そのとき、ふとぼくは、この岩に見おぼえがあるような気がした。

――いつかここへきたことがあるぞ。いつだっけ。そうだ。みんなで、川の中を歩いていったときだった。どこまでも、どこまでも、川をさかのぼっていたときだ。なんだ。こんな近くだったのか――。

ぼくは、段々岩の上に立って、あたりを見まわした。いま三角平地から出てきたところには、二本の木がならんで立っていた。その木のあいだが黒くあなのように見えるが、そこが三角平地の出入口だった。

「あっ。」

と、ぼくは、声をあげた。その木は二本とも、もちの木だった。

ぼくは、声を出してわらった。こんなところにあった！

「この山はぼくの山だぞ！」

ぼくは思わずそういった。⑥得意でたまらなかった。もちの木のそばまでもどり、皮をすこしはいでポケットへ入れた。

（佐藤さとる『だれも知らない小さな国』より）

※　出題にあたり、本文を省略したところがあります。

（注）　とりもち――さおの先などに塗って小鳥や昆虫を捕らえるのに使う粘りけの強いもの。

問一　〜〜線部ⓐ〜ⓓ「ここ」の指示内容が同じものの組み合わせとして最も適当なものを、次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ⓐⓑ――ⓒⓓ

イ　ⓐⓑⓒ――ⓓ

ウ　ⓐⓒ――ⓑⓓ

エ　ⓐ――ⓑⓒⓓ

問二　――線部①「大目玉のあとで、年上のがき大将は、舌をだして、自信たっぷりにそういった」とありますが、この時の「がき大将」の説明として最も適当なものを、次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大勢で近所の庭にあったもちの木をねらって失敗してしまったので、今度は見つからないように少人数で事を運ぼうと考えている。

イ　持ち主の許しを得ずにもちの木から皮を取ろうとしたことを反省し、誰(だれ)にも迷惑(めいわく)をかけない方法を考えなければならないと心を改めている。

ウ　勝手にもちの木の皮を取ろうとしたことが発覚してひどくしかられてしまったが、今度は別の場所で探せばいいと気持ちを切り替えている。

エ　仲間たちが好き勝手にもちの木の皮を取って怒られたことに腹を立て、次は自分の言いつけを守れる者だけを連れて行こうと決意している。

問三　――線部②「峠の向こう」とありますが、「峠の向こう」はどのような場所ですか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　町にないものが何でもあると、子どもも大人も信じている夢のような場所。

イ　普段住んでいる町とは異なる雰囲気があり、子どもたちに期待を抱かせる場所。

ウ　四季の自然を感じることができ、つらいことがあったら必ず訪れたくなる場所。

エ　険しい道を越えた先にあり、不気味であるため大人たちでも近づかない場所。

問四　――線部③「ぼくたちはうなずいた」の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　遠くまでいかなければもちの木を見つけることはできないという意見に同意している。

イ　農家の目を避けるためには山の中まで行くべきだという主張に納得したふりをしている。

ウ　もちの木を見つけるために険しい道を進まなければならないことに恐れを抱いている。

エ　目的を果たすためには自分たちの団結が必要になるとそれぞれが覚悟している。

問五　――線部④「ぼくはがっかりした」とありますが、どうしてですか。五十字以内で説明しなさい。

〈下書き〉

問六　――線部⑤「いきごんだ足どり」とありますが、この時の「ぼく」の心情を表すような情景描写を、本文中から九字で抜き出して答えなさい。

問七　――線部⑥「得意でたまらなかった」とありますが、「ぼく」がこのような気持ちになったのはどうしてですか。六十字以内で説明しなさい。

〈下書き〉